想いを叶える在宅医療

コールメディカルクリニック若松　院長　　大垣　拓郎（若松）

この度は、北九州市医報へ寄稿する機会をいただきまして、誠にありがとうございます。私は2003年に産業医科大学医学部を卒業し、今年で21年目になります。産業医科大学病院での２年間の臨床研修の後、約10年間は臨床現場から離れ、産業医（嘱託産業医、専属産業医）と産業医科大学の教員（医学概論教室）をしていました。この間、2011年に東日本大震災や福島原子力発電所重大事故が起こりましたが、被災者の方々の役に立つような臨床能力が備わっていない自分自身をとても不甲斐なく思っていました。また、いざ目の前で倒れる人を見つけたとしても、当時の私には救急医療の知識も技術も経験も無く、何もできないであろう自分自身を想像し、とても情けなく思うこともありました。

そういった医師としてのコンプレックスが膨らむにつれて、臨床医としてもう一度やり直してみたいという気持ちが高まり、まさに一念発起、2015年に健和会大手町病院の救急科に入職しました。健和会大手町病院は、北九州市随一の救急医療の拠点です。西中徳治先生をはじめとした数多くの先生方から「目の前の命から逃げないこと」を学び、日本救急医学会救急科専門医の資格を取得することができ、救急医療・緩和ケア・テロ災害医療に関する数多くの研修を通して救急医としての視野を広げる機会にも恵まれました。健和会大手町病院で５年ほど過ぎた頃に、救急医の経験をどのような形で生かしていくのが私らしいのかを真剣に考えるようになりました。家や施設から救急搬送されてくる患者さんの中には、「住み慣れた家や施設で温かく見守られながら過ごしたほうが幸せだったのではないだろうか？」と思ってしまうケースが少なくありませんでした。ご家族の意に反して救急搬送されてきたケースもありました。家や施設で救急判断ができないがために救急搬送されてきたケースもありました。

このようなケースを目の当たりにするうちに、

コールメディカルクリニック若松の外観

「自らが在宅医になり、在宅医療の現場に行けば、救急医の経験が大きく役立つのではないだろうか？」との思いが日に日に大きくなり、2020年10月に医療法人コールメディカルクリニック福岡（宗像市）に入職しました。医療法人コールメディカルクリニック福岡は、産業医科大学の９学年先輩で救急医の岩野歩先生が中心になり、「生きるに寄り添う」を理念とした在宅医療をしていました。在宅医として経験を積む中で、医師としてのターニングポイントになる患者さんとの出会いがありました。当時の私とほぼ同年齢の直腸癌末期の女性が、鼻カニューレで酸素投与を受けながら、イレウス管を留置し、迫り来る死の恐怖と戦いながらも、１日１日を懸命に大切に生きていました。患者さんの思いを汲み取っていくうちに、福岡ソフトバンクホークスの明石健志選手の大ファンで、「球場に応援に行きたい」との想いを温め続けていることを知りました。そこで、その想いを叶えるべく、在宅医療チーム（ケアマネジャー、診療チーム、訪問看護）が一丸となって野球観戦ツアーを企画・実現しました。まさに命がけでしたが、試合観戦中の患者さんは、１つの想いを成し遂げた充実感と達成感に満ちた表情をしていました。その姿をご家族が嬉しそうに見つめていました。その３週間後、患者さんは愛するご家族に見守られながら天国へ旅立ちました。それまで私は、「できる」・「で

きない」の２択で物事を考えていましたが、「できないではなく、できるようにする」という発想があることを教わりました。そして、「患者さんの想いを叶えることが、どれほど尊いものであるか」を身をもって実感することができました。

医療法人コールメディカルクリニック福岡での濃密な３年間を経て、私が愛する地域で患者さんの想いを叶えていきたいと思うようになり、2023年10月に若松区青葉台南にコールメディカルクリニック若松を開院し、原稿執筆時点（2024年４月）で半年が経過しました。「思いを汲み取り、想いを叶える」、「地域を愛し、地域で生きる」の理念のもと、医師１名・看護師１名・医療事務１名・経理１名の４名でスタートした当院は、医療事務１名・一般事務１名・運転手１名が仲間に加わり、総勢７名で若松区・八幡西区・遠賀郡の在宅医療の一翼を担っています。通院困難となった患者さんを、産業医科大学病院をはじめとする近隣の病院・クリニック・ケアマネジャー・訪問看護ステーションからご紹介いただいています。最近は、クチコミでのご相談・当院のホームページを見てのご相談が増えてきました。これまで、癌末期、難病、障害、認知症、脳血管疾患、心疾患、呼吸器疾患、精神疾患など、幅広い患者さんを見てきました。家や施設にいながら、血液・尿・心電図・エコー・血液ガスの検査、末梢点滴管理・中心静脈栄養管理、血糖管理、尿カテーテル・腎瘻カテーテル・気管カニューレ・経鼻胃管・胃瘻ボタンの交換、PCAポンプを使用しての持続鎮痛や持続鎮静、胸腔・腹腔・腰椎・関節の穿刺、傷の縫合・イボ切除、腸管ヘルニア・関節脱臼の整復、に対応しています。

私が在宅医療の２つの柱と考えているのは、「救急医療」と「緩和ケア」です。重症度や緊急性に関わらず、患者さん・ご家族が救ってほしい、急いで来てほしいと訴えるものは、「救急医療」。同じように、たとえ命に関わらない軽症の病気でも苦痛を和らげることは、「緩和ケア」。このような哲学のもと、私は多職種による「在宅救急緩和ケア　ワンチーム」の構築をめざしています。「在宅救急緩和ケア　ワンチーム」では、訪問看護が最前線に立ち、治療グループ（訪問薬剤、訪問歯科、在宅酸素）と生活グループ（ケアマネジャー、相談支援専門員、訪問リハビリテーション、訪問介護、訪問入浴、福祉用具、訪問マッサージ、訪問理美容）が患者さん・ご家族を支え、当院は各メンバーの声を尊重しながら患者さん・ご家族に関わっています。

この関わりの中で、当院が特に大切にしているものが、患者さん・ご家族の「想い」です。「想い」とは、患者さん・ご家族が「何よりも大切にしたいこと」、「どうしても叶えたいこと」です。ある患者さんが「家で最後まで過ごしたい」と言う時に、本当は「入院したいけど、お金がかかるから申し訳ない」と考えているかもしれません。ある患者さんが「最後は入院したい」と言う時に、本当は「家にいたいけど、迷惑をかけるから入院するしかない」と考えているかもしれません。このように、「本当の想い」を見きわめていくことが在宅医療の醍醐味です。ただし、ついつい「患者さんの想い」ばかりに目が向きがちになることへ注意が必要です。在宅医療は日常生活の場で行われますので、ご家族の緊張・不安・ストレスが途切れることなく継続することにも目を向ける必要があります。「ご家族の想い」にも気を配ることが在宅医療の深みを増し、より良い医療の提供につながると考えています。

今後よりいっそう、地域に根差し、地域から必要とされ、かゆいところに手が届き、優しさと温かさに溢れている、そのような在宅医療を提供していけるように、当院スタッフ一同、研鑽を深めてまいりたいと思っています。北九州市医師会の先生方・スタッフの皆さん、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

クリニック看板

診療車